

大阪府立中之島図書館所蔵・織田作之助「清楚」草稿二点
(織田文庫―草稿46・織田文庫―草稿Ⅱ―90)

勝 倉 明 以

【凡例】

- ・原則として、漢字は適宜通行の字体に改めたが、仮名遣いは原文に従った。
- ・改行は、原則として織田のものに従った。
- ・原稿用紙に書かれた織田直筆のものだと考えられる織田文庫―草稿46のナンバリングは、中央上部と右端上部の二ヶ所に書き込みが確認できる。そのため、《4―5》のような表記とした。この場合、中央上部のナンバリングが「4」、右上部が「5」であるという意味を持つ。
- ・織田文庫―草稿Ⅱ―90のナンバリングは、原稿用紙中央上部にのみ書き込まれていることから、《1》《2》と言った表記で示した。《1》は、原稿用紙に「1」と書かれていることを指し、ナンバリングが打たれていない草稿は《》という表記とした。
- ・本原稿の行間は、原則として織田が空白行として表した行数分空けた。ただし、原稿用紙冒頭の空白行は翻刻文には載せず、詳細を注釈に明記した。
- ・本文中に用いられている「□」○の二種類の記号に関しては織田作之助の用いた表記をそのまま記したが、それ以外の記号は、次の方針に基づいて新たに用いた。
- ◇↓加筆された表現を示す。削除箇所の訂正や挿入のために、行間や欄外に書き加えられた表現を示す。
- ↓削除された表現を示す。塗りつぶされた文字も可能な限り表記した。「◇」は加筆後に削除された表現を示す。
- ↓判読不可能な文字を示す。
- ・本稿は、大阪府立中之島図書館・織田文庫に所蔵されて

いる織田作之助「清楚」直筆草稿である「織田文庫―草稿46」と「織田文庫―草稿Ⅱ―90」の合計二点の翻刻を行うことを目的とする。現在確認されている「清楚」の草稿は、この二点のみであるにも関わらず、これまでの研究史において翻刻や紹介がなされていないことから、今回資料紹介を行う運びとなった。そのため、本稿では紹介のみに徹し、資料に関する生成論的分析は筆を改めて行うこととする。

『織田作之助「清楚」草稿(62葉)・織田文庫―草稿46』

《1―1》⁽¹⁾

清楚⁽²⁾

織田作之助

上本町六丁目から再び電車に乗った。が、こんどは船山が一緒だった。

《2―2》

仕方がないから、本を読む。しかし、「見合ひの心得」などといふ本は、はしたないから読まない。岸上庄造著「上代史の研究」といふ本を読む。

岸上庄造は、(菊代の父の友人で、こんどの)結婚の世話をしてくれる恩人である。

《3―3》

云々といふ言葉を想ひだした。

「よほど、考へたでせう? 転業するまでは……」

「はあ。なにしろ、十六の歳に悉皆屋へ丁稚にはいり、やつと一人前に成れて、独立した間もなんでありましたから、自分も考へました。しかし、軍医殿、本にも自分の「職業」(商売)をくさすわけではありませんが、男だてらに、白足袋はいて、前垂かけて、へなへなして居る(女相手の)商売がつくづくいやになりました。[。]のであります」

「なるほど(へ)」

正平はうなづいた。

「――しかし、いい工合ひに書記の職があつて……」

よかつたねと言ふと、

「はあ、倅ひ隊にゐた頃の友達が、(もとから)その工場[に]の庶務に居りましたので、

《3―4》

云々といふ言葉を想ひだした。

「しかし、よく思ひ切れたですね? よほど考へたでせう[な。](へ) 転業するまでは「……」?」

「はあ、なにしろ、十六の歳に悉皆屋へ丁稚にはいり、やつと一人前に成れて、独立した間もなくでありましたから、自分も考へました。しかし、軍医殿、なにも自分の商売をくさ「く」〈す〉わけではありませんが、男だてらに、白足袋はいて、前垂かけて、へなへなしてゐる女相手の売買がつくづくいやになつたのであります。——倅ひ、隊にゐた頃の友達が、もとからその工場の庶務に「ゐ」〈をり〉ましたので、その世話で、「■今の職」……「■」。自分は、算盤が達者なものでありますから

《4—5》

「あんまり、奥さんのことをのろけると、轆かれますよ」

「上六まで■町六丁目」しかし、船山はしやあしやあしたもので、

「女房は亭主が「朝」会社へ行く時、ネクタイを結んでやるのを、「たの」娘の頃から憧れてをつたのであります、自分は国民服を着てをりますので、それが出来ないというて「笑」〈残念が〉つてゐるのであります。自分は、女房に言つてやつたのであります。ネクタイなん〈ち〉うものは、ありや大人のよだれ掛けや」

「どうもかなはん」

「なにがですか？」

のろけてゐるとは、船山は気がつかないので「するだ」

あつた。

「あははは……」

正平はいきなり笑ひだし

《2—6》

一 (3)

地下鉄の淀屋橋から乗り込んで来た老人⁽⁴⁾、正平の前の吊革を握つた。

存外骨組みの逞しい腕だが、けれど歳はもうかれこれ七十にもならうか。

「どうぞ」

掛けて下さいと立ち上つた。けれど、老人は手を振つた。

「わてはこないして立つてる方がラクでつかい」

正平はちよつとすかさされた気持がした。

「おれの服装を見て、へんに遠慮してゐるのかも知れないぞ」

と、正平は苦笑した。

南方の戦塵にまみれて還つて来たままの姿なのだ。「」が、けれど、明日〈から〉はもう脱がねばな

《26—7》

千日前の金比羅前通りから堺筋の方へ折れた咄嗟に、さう呟いてふと新世界の方の空を仰いだ途端、正平は、

「おやつ」

「どうもをかしい、こんな筈はないと、首をひねつ」「た。」
〈て〉「なんだか勝手のちがふ感じに間誤ついたが、なぜさういふ感じがしたのか、〈その原因が〉暫らく納得できなかった。」

道を間違つたのではないかと、きよろきよろあたりを見廻したが、まが「つ」ふかたなくそこは日本橋筋二丁目の停留所附近である。

してみれば、やはりをかしい。子供の頃から見馴れて来た空の感じが、全然ない

《26—8》

千日前の金比羅前通りから、「日本橋」堺筋の方へ折れた咄嗟に、さう呟いて、ふと新世界の空を「見上げ」〈仰い〉だとたん、正平は、

「おやつ」

「と思つた。」どうもをかしい、こんな筈はないと、首をひねつた。

そこに聳えてゐる筈の通天閣が、姿を消してしまつてゐる。「。」のだ。

正平は勝手のちがふ感じに間誤つて、

《27—9》

路地から出て来た男から、いきなり挙手の礼をされた。

びつくりして、こちらも礼をかへし、つくづく見ると、国民服に巻脚絆といふいでたちは「。」昔の法被姿を變つてはゐるが、鼻に見覚えがあつた。「髭」〈鼻〉の勘さんで通つたセメン菓子売で、白

《27—10》

路地から出て来た「■■■■」〈男〉「に」〈から〉、いきなり挙手の礼をされた。

びつくりして、こちらも礼をかへし、つくづく見ると、国民服に巻脚絆といふいでたちは昔とちがつてはゐるが、鼻に見覚えがある——「赤」鼻の勘さんで通つたセメン菓子売りである。

《30—11》

二(5)

「通天閣が無くなつたのには、驚きましたよ」

「何年か振りで」親子三人水いらずの夕飯が済んで、爪楊子を使ひながら、うす暗いあかりの下で、正平が言ふと、

《30—12》

二⁶

正平も変つたが、大阪も変つた。が、

《32—13》

と、肚の底から意味もない大きな息を吐いた。なにかはつたことを言ふ時の父の癖だと、ちよつと

《57—14》⁷

いどこへ行きよつたんやろ

と、落した前歯を探して、運動場をあるさまはつたといふ小話がある。

爾来、その試合を自ら記念して、脱けた前歯をいれようとせず、野戦病院で偶然正平が再会した時も、前歯のないせるか、にこにこして、いかにも屈託のなささうな顔だったが、その顔が息絶えて行くのを、〈正平は〉軍医として見なければならなかつたのだ。

その時の辛さ。

妻も両親もなく、〈二十歳になる〉妹と二人ぐらし「の」だつたといふ。

「さうだ、明日は中瀬古の妹を訪問してやらう」

呟いたところへ、電話を掛け終つた母がはいつて来た。

「どやつた？ 来ると言うつたか。今さんさん庄造の噂

へし」とつた「ところや」さかい、噂をすれば影で、顔を見せよるやろ思つてたところや」

《58—15》

をすれば「」影で、顔を見せるだらうと思つてゐた、といふ顔で、父はきいた。

「今夜はぬけれんさかい、明日の晩行く言うたはりました」

「見る」場所や時間の打ち合わせしといたか」

「明日の晩行つて決める言うたはりました」

さう言つて、母はすこし不服さうに唇をとがらせて、

「——どつちみち顔を見せ合ふだけや「し」さかいへ」さうたいさうなことはいらん。

《72—16》

言つてて良いか……」

あと言葉が続かず、正平は熱っぽい眼で、元枝といふその娘の顔を見た。

咄嗟に、正平は、

「明日は見合ひできない」

と、思つた。

「——その証拠に、今日かうして見合ひしてゐるではないか」

（と、いふ風な）そんな理詰めな考へ方から、さう思つたのではない。

正平の心に、どこからか、号令が掛つたからである。「このひとに求婚しろ」

なんの迷ひもためらひもない、まるで香車で歩を払ふやうな、即座の簡単な決断だつた。

それは、むしろ乱暴と言つてもよいから、「だしぬけの号令」不意打ちの ■

《72—17》

言つて良いか……

あと言葉が続かず、正平は熱つぽい眼で、元枝といふその娘の顔を見た。

咄嗟に正平は、「明日は見合ひできない」と、思つた。

しかし、それは、

「——その証拠に、おれは今日かうして見合ひしてゐるではないか」

と、いふ風なそんな理詰めな考へ方から、思つたのではない。その時、どこからか、「正平の心に、」号令が掛つたからである。

「このひとに求婚しろ」

なんの迷ひもためらひもない、まるで香車で歩を払ふやうな、即座の簡単な決断だつた。むしろ、乱暴といつてもよいからぬだつた。

だが、果して、■乱暴だらうか。

「おれの夢みてゐた浅間和子のいふひとは、ほんたうはこのひとなのだ。実際の浅間和子

《76—18》

と、思つた。

このお父さんをさしおいて、直接この娘さんに話すのは、家族制度を無視した不謹慎な態度といふべきだと、正平は「ひやつとした」なにか済まないやうな気がし、言ひだしかけ「て」へたとたんこの老人がはいつて来たのは、もつきの倅ひだつたと、思つた。

「岸上さんでしたか、娘からお噂は何つてをりました。よく来て下「さ」すつた、さうどうぞ上つて下さい。むさくる（し）いところですが」

薦められて、正平は、

「はあ、ありがたうございます。ただいま、お伺ひいたしますと、奥様「には」が……。ほんたうに何と申し「てよろしい」あげてよいか、おくやみの言葉もありません。ここでお「い」暇するつも

《81—19》

「そりや凄いですな」

正平の友人に、日本の高い山といふ山は、たいてい征服したといつて威張つてゐる登山家があるが、いま、四十年海を戰場として来たといふ老人の話をき「く」へいてみると、その友人の自慢もなんだか鼻もちならぬ虚栄みたいと思はれた。

「——四十年前といふと、僕がまだ生れ「■■■前」てゐない頃ですね。その頃から、あなたは既に今日の大東亜戦争に直接役立つことをして来られた「ん」わけですね。」

すると、老人はとんでもないといふ風に手を振つて、「いや、わしはそんな立派なことをして来たとは思「へ」ひませんよ。ただわしは、ほかの道に気が散らなかつたといふだけでしてな」

「老人は」へと、謙遜した。

《81—20》

「そりや凄いですな。僕の友人で日本の山は全部征服したといつて威張つてゐる登山家がありますが、

《81—21》

「そりや凄いですな」

正平の友人に、日本の「高い」山は全部征服したといつて威張つてゐる友人があるが、いま藤吉老人が四十年海を戰場として来たといふ「いふ」語る話を

《81—22》

「そりや凄いですな。僕の友人で日本の山は全部征服したといつて威張つてゐる登山家がありますが、率直に言ひますと、僕はさういふ自慢は昔からあんまり好きぢやなかつたんです。ことに、戦争に行つてからは、

《87—23》

正平はうはごとのやうに言ひつづけた。「おれのコレヒドール熱に打ち克つどんな熱があるといふんだ」

さうして、歯をくひしばつてゐるうち、なんといふ天佑か、端午の節句といふ男の日を期して火蓋を切られたコレヒドール「攻略」攻略作戦

《88—24》

「さうでしたか。いや、良い話をきかせて下さつた」藤吉老人は、すっかり興奮してゐた。

「——いまのお話をきいて、わしも「す」へは「つ」「か」へきり覚悟がきましたわい。「元枝」」

《92—25》

正平は「緊張し■」、「あはただし」く胸の動悸をきいた。老人は渋い顔で、続けた。

「倅ひ、こんどこの娘に婿養子が来てくれることになりましてな。わしもこれで「気掛り」もう心配はなくなつたといふわけです。あんた方には、まだかういふわしの気持は判らぬ「で」ぢやらうが、

《95—26》

だ清潔な眼がこつちを見てゐた。

咄嗟に頭を下げることもできず、身体を泳がせたまま、正平の眼はち

《97—27》

「おやつ」

と、思つて、見た。咄嗟に想ひだした。

「船山一等兵だ！」

野戦病院から内地の療養所へ「■」送られた

《98—26》

きながら偶然正平の姿を車中に発見して、なつかしさ「に」
「のあまり」正平を「会」見失ふまいと、電車「を」へに
追ひ「かけ」へつかうとし「て」来「へゐ」るの「であ」だ。

が、正平は「かう」呼んだ。

《103—29》

言ひながら、船山は名刺を見て、

「——軍医殿のお宅は、あのウ、呉服屋さんでありますか？」
「よく知つてるね」

名刺には商売は書いてなかつたのだ。

「そりやもう、え、へ、へ」

船山は「、」おちよほ口をして笑つた。

「——自分も同商売であります」

「へえ？そいつは初耳だ。やつぱり呉服屋？」

「いえ、友染悉皆業「を」でありま「す」へして」

「あ、さうか」

「ここにも「ひとり」へひとり」転廢業の必要な人間が「ひとり」あると、正平は、ひとごとではなかつた。

「——で、転業

《103—30》

言ひながら、船山は名刺を見て、

「——軍医殿のお宅は、あのウ、呉服屋さんでせう？」
「よく知つてるね」

名刺には商売は書き入れてなかつたのである。

「そりやもう、え、「へ、へ、へ、へ」
船山はおちよほ口をして笑ひながら、

「——自分もどつちかといひますと、同商売の方でありますから」

「へえ、そいつは初耳だ。呉服屋だとは知らなかつたね」

「いえ、友染悉皆業であります。呉服は扱つてをりますが、お宅〔■〕さま「なんか」に「比」比べると「……」、自分なんぞはほんの手間賃仕事であります」

〔■〕船山はへんに謙遜した。

「ここにもひとり転廃業の必要な人間がある——と、正平はひとごとではなかつた。」

《103—31》

言ひながら、船山「も」は名刺を見て、

「——あ、軍医殿のお宅は、……あのへ、呉服

《104—32》⁽⁸⁾

「ここが銃後であるといふ想ひが、びへしやつと来たから「もはや」である。船山は一家の主人として、

《110—33》

「櫻の若葉吹く風も暁清き五月空——」とうたつた（京都）

高等学校時代の記念祭、その日の校庭から見た大学の時計台「に」を含む新緑の色。

「鴨川堤から蔡祭祭、葬祭の行列が縫うて行く鴨川（堤）の新緑。
薄靄のかかつた明け方の東山の新緑

《113—34》

「来たか」

といふやうな態度である。

「空いた椅子があるだらう。（まあ）そこへ掛けろ」

とも言はない。

椅子に掛けても、たれも見向きもしない。

「勝手にしろ」

と、いはんばかりである。

さうなると、

「喫茶店とは

《113—35》⁽⁹⁾

「来たか」

といふやうな態度である。（空いた）椅子へ掛けろとも

言はない。

椅子に掛けても、たれも見向きもしない。勝手にしろといはんばかりである。

「ちよつと」

と、呼んでも、誰も寄つて来「い」へな「い」。

隣の椅子へ（飲物を）運んで来た女給仕人を擱へて、注文しようとする、急に眉をひそめて、

「あとにして「下さ」頂戴」

いまは忙しいからと、「すり」邪険にいつて、行つてしまふ。

正平は「急に神経」へ（先の客が）こぼ「れた飲」して行つた飲物が浮いてゐる卓子に、肘をつきながら、にはかに神経が苛立つて来た。

かねがね正平は喫茶店といふものを、をかしたものだと思つてゐる。

「喫茶店とはなんぞや」

と、考へてみると、「実にこつ」都会のいた

《114—36》

るところに存在するこの変挺な場所「が」の正体が、不可怪でならない。

お茶をのむところか、しかり。なんとなく休むところか、しかり。雑談するところか、しかり。音楽をきくところか、しかり。が、そのいづれでも

《114—37》

るところに存在するこの変挺な場所の正体が、不可怪でたまらない。

お茶を売るところか、しかり。しかし、伝票といふ不可怪なもの「で」へ（によつて）歸りに会

《114—38》

るところに存在するこの変挺な場所（の正体）が、不可怪でたまらない。

（金を払つて）お茶を

《136—39》

苦しし（た様子も見え）なかつた。正平から借りた金を、財布の中

《140—40》

うです」

「それなら、生徒をここへ連れて来ればよいだらう。一緒くたにして、講義をきかせてやる」

かう答へて、口髭を拭いたといふのである。

この話をきいてゐる「以上、」正平はいま庄造が口髭を拭いたのを見て、

「こいつは話が永びくぞ」

と、覚悟を決め「た。」ざるを得なかつた。

〈案の定〉庄造は「そろそろ話を」〈実に悠悠と「して」話の糸をたぐつて行つた。

「家を出よう」午後三時にひとに会ふ約束をした。約束の場所まで一時間掛る。で、二時に家を出ようとするとところへ、電話が掛つて来た」

「呼出し電話でせう」

「さうだ。で、〈電話口へ〉出てみると、

《142—41》

（さうぢやないか。おれがかうして電話を掛けてるやうに、電話「を」で断ればよいぢやないか）

（電話電話とさうむやみに、電話をふりまはすな。だいいち、

《143—42》

ね」

「さうだ、きらひだ」

庄造は〈あやしげな〉料理屋でだされた

《168—43》

作者はあらかじめこの物語「を」〈で〉正平の三日間にわたる行動を描くといふ構想を樹てた。

第一日、地下鉄——わが家

第二日、交番——浅間和子の家——市電——船山上等兵

との出会ひ——上六——千日前の喫茶店——南海電車——庄造「■」との出会ひ——国民学校の運動会……………

第三日、……………

まづ、かういふ予定を樹てた、といふより、書いて行くにつれて、自然にかういふことになつたのだが、ところで、正平の服装だが、第一日における正平の服装については文句はない。作者もはつきり軍服と「書」指定し、画描きさんも正平を立派な士官姿に描いてくれた。

《168—44》

問題は正平の服装である。

作者はあらかじめこの物語の構想を樹てる時、正平「の」〈を中心とした〉三日間の出来事を描かうとした。

《186—45》¹⁰

「ああ、見てみますよ。むろん見ますとも。見えなかつたら、中瀬古のことだから、棒高跳して、あなたの方を見ますよ。あなたがどうしてゐるかと思つて……」

正平はふつと涙が落ちさうになつた。

「さうでせうか。「あ」わたくし、本言つたら、「もつと兄さんによく」兄さんからもつと見えやすい所へ行「かう」きたいんですの」

「はあ……？」

「南方へ行きたいんです。兄さんの戦病死した場所へ……南方へ日本語を教へに行「かう」きたいと思つてゐるのです。〈さう思つても〉あたくしなんか駄目で「さうか」〈すけれど〉」

「いいえ、そんなことはありませんよ」

「へしかし、願書をだし「て置きましたの。」^(マ)ましたら、中等教員の免許がなかつたら駄目「です」だと言はれましたの。わたくし勉強して免許とりますわ」

《186—46》

「〈ああ〉見てみますよ。きつと見えますよ。見えなかつたら、〈■—ジャンプ〉して、見ますよ、中瀬古のことだから棒高跳をしてでも」

《196—47》¹⁾

「そりやさうでせうけど、しかし、〈いくら〉客は客でも「……」、あんな奴に「」……」

「こいつ奴おもても、〈切■もつて来られたら、売らんわけにいかん〉。売れば大事なお客さんや。商売人にとつて、お客ほど大事なもん「■」はない」

《208—48》

「さながら、動物

ええ、臭いの臭

《214—49》

母は飯を盛りながら、

「お前真赤な顔して、大丈夫か」

「なにがですか」

「いや」明日の見合ひが」

「見合ひ見合ひつて、さう騒がないで下さい。いい加減照れてしまつてゐますからね。大丈夫ですよ、それよか、伯父さ

明日まで赤

《214—50》

「それでみんなでつせ。もううちで飲みたい

《215—51》

るんやつたら、はよ来てくれたらええのに」

「伯父さんは今日は来ませんよ」

と、咽まで出かかつたが、正平はやつと思ひ止つた。

下手な芝居なら、ここで正平がわざとらへしく咳ばらひをして見せて、観衆が〈他愛なく〉笑ひだすといふとこ

ろだが、観衆の気持ちなぞ正平は与り知らぬ。咳ばらひなど、したくないので、〈もちろんせず〉なんとなくつまらなささうな顔をして、ちよほんと控えてゐた。

「電話掛けてみたらどないや」

しびれを切らした父が、さう母に言つた。

正平はあわてて、

「また電話ですか」「」。伯父さんいやがりますよ」と、言つた。

「いやや言つたかて、ほかのことと掛けるのんと違ふし、「かめへ」遠慮はいらへん」

さう言つて、母が出ていかうとするのを、

「待つて下さい。「いま飯を食つてしまひます」

《216—52》

「から」僕が掛けてあげますよ」

大いそぎで「飯」〈御〉飯を食べてしまふと、正平は「電話口へと」廊下へ出て、電話口の前でぼかんと「突」突つ立つてゐた。

母に無駄をかけさせまいと思つて、自分で出て来たもののみすみす居らぬときまつたひとに、いくら正平でも〈電話は〉掛けられなかつた。

《222—53》

「当ててごらんなさい」

菊代は微笑しかけたが、さううまく

《223—54》

「軍医さん」

「まあ」

「当つた？」

「気味がわるい」

「こつちも気味がわるい」

《225—55》

さつきのコドモたち「が」〈も〉、こつちを振り向いてゐて、また頭を下げた。

それに応へたとたん、「菊代」清子は、

《226—56》

「あ、電車が来たわよ」

と、駈けだした。

〈荷車を引いた〉牛が駅の前を横切つてゐて、二人はさへぎられた。

「いやね」

さう言つて、〈清子は〉また笑つた。

《235—57》¹²

「ぶつ」

をかしさがこみ上げて来て、しばらく人気つない廊下で、
「あはは……」

と、

《237—58》

正平は菊代（の胸）につつましく書かれてあつた「階」
借書の字を、想ひだした。それはいかにも女教員らしい格
調の正しい「文字」〈筆跡〉であつた。

《247—59》¹³

のか」

それもきいてみたかつた。が、きくよりも、自分で言つ
てしまつた方が早い「それを」。そして、その序でに

《254—60》

ん「そ」のことになる、あわてませんからね。たとへば、
僕に牧場で乳しほりをやらせてごらんなさい。豚の乳〈房〉
へ手をもつて行くやうなことはしませんからね」

「あたりまへだ。あはは……」

庄造は笑つたが、急に生真面目な顔になると、

「——それはさうと、正平、（いまきいたんだが、）お前親

爺に転業をすすめたんだつてね。こいつの方が満点だぜ」
「さうですか。」「■■■」「（へいつか）」（満点ですか。）満点が
二つもあつちや困「るね」るな。

《255—61》

ころなんだ」

「そんなちやありませんよ。れいの三銭不足の話ですよ。

無事に大阪へ帰れましたか」

「あ、それか」

庄造は口髭を拭いた。

「——で、あの時だね、おれはその生徒に言つたんだ。君
はお腹がふくれて珈琲がのめりや、べつにホツトケーキで
な

《——62》¹⁴

「……」もともと庄造はだいの電話きらひでな、「こ」相
手の顔も見んと話するのは、失礼に当るちうのや」

そこで、父はくすんと笑つた。正平は、れいの幸

〔織田作之助「清楚」草稿（12葉）・織田文庫―草稿Ⅱ―90〕

《1》¹⁵

清楚¹⁶

織田作之助

（十八）

「どうやら、動きましたね」

正平が「言ふ言葉」すこしピッチ

話の

《》

清楚¹⁷

織田作之助

（十三）

《1》

清楚¹⁸

織田作之助

（十八）

「どうやら電車も動きだしましたね」

だから、すこし話のピッチをあげてくれといふ意味で、

正平が言ふと、庄造は、

「ああ、動いたやうだね」……

と、無関心に答へて話をつづけた。

「――先生と言はれたから、振り向いた。すると、先生、一銭貸して下さいと言ふんだ」「驚

《1》¹⁹

清楚

織田作之助

（二十七）

小「菊」谷菊代は、昨日からそはそはとして落ち着かなかつた。

《1》

清楚²⁰

織田作之助

（二十九）

「とにかく、まあ、はいらう」

庄造と正平は、家の中にはいつた。父は庄造の顔を見るなり、

「今夜まで何してたんや」「へ、へ、いつたい、

《1》

清楚²¹

織田作之助

(二十九)

二人は家の中へはいった。

「今頃まで何してたんや、ひとを散々待たしといて……」
父は庄造の顔

《2》

「——しかし、正平は見合ひ「が」へは、済んだ言うとるがね」

庄造は、正平の顔を見た。正平は、「済」

「ああ、済みましたよ。「済」でも同様ですよ。「二」〈三〉
分間の見合ひでした。「二」〈三〉分間でも「二時間でも」
見合ひは見合ひですからね。「二」〈三〉分間でいけなければ、
では、何時間顔を見「合」せあつて居れば、良いのか
と言ひたいところですね。とにかく済みましたよ」

と、文字通り済ました顔であつた。

「まさか、おれをからかかつてるんぢやないだらうな。ひと
の足を踏んだり、からかつたりは、いやだぜ」

「いや、からかひませんよ。本当です。」〈何がからかふも
んですか。〉僕は伯父さん「が」に感謝してゐるんですよ。
良い妻君を見つけてくれましたね。ありがたう。礼を言ひ
ますよ」

「——と、早くで、早速ですが、
べこへん」と頭を下げて、

《3》

「い、大ありますよ。僕にあんな良い妻君を世話して下
さらうといふんですから。礼をいひます」

べこんと頭を下げて、

「——と、見合ひは済んだと言ひましたが、実は、
相手の娘さん、つまり小谷菊代嬢ですね、あのひと「が」
はたぶん今日会つた「姿」〈僕〉が見合ひの相手だとは気
づいてないでせう。で、伯父さんから、ひとつ話して、き
いて見て下さいませんか。今日学校の廊下で話をした
〈そそつかし屋の〉男「を」が気に入つたかどうか。序でに、
僕の方はなにからなまでに気に入りました。「二」と、伝へ
て置いて下さい」

「なんだか、わけがわからないな。いつ、どこで、誰と、
何をしたか——といふ風に、喋つて貰は「ぬ」〈へん〉こ
とには。お前の喋り方はてんで歴史的ぢやないよ」

と、庄造が言つた時、母がはいつて来て、
「正平、電話で「すよ」〈つせ〉。女のひとから……」

《4》

と、言つた。

「へえ、「」?この家はまだ電話を供「」〈出〉しとら
んのか」

といふ庄造の声をききながら、正平は電話口に出た。

「もし、もし、岸上正平さまでいらつしやいますか」

きき覚えのある声に、正平はどき■**■**「まぎしたへ」

《72》

ふ「ぬ「吉野の花」(二代男)よりも面白いと見て、その何花たるを問はず、書きまくつたのだ。すべてを肯定したのだ。人「事」(生)百般を殆んど不見転式に受け入れたのだ。

「僧ともならず、……又老花ともみえず、……」は、だから、その意味で見て行くと、西鶴の思想をいみじくも「伝」要領した言葉になる。

《76》

ゐる。似てゐるのは容貌だけではない。野暮でもなかつたらしいのは、二人とも同じらしかつた。けれど、スタンダードはサロンの話術家としてその「才気■」縦横無尽の

《76》

ゐる。「容貌」似てゐるのは、容貌だけではない。作家として、人間として似てゐるのだ。野暮で「持」(も)てなかつたが、しかし、一人はサロンの話術家としてその(縦

横無尽の)才気を振ひ、一人は暫間として、俳諧人として、「無」その冴えた才智を見せ、そして「こ■とも」描いたのはもてる男ジュリアン・ソレル、

【注】

(1) 織田文庫―草稿46は、4000字詰め左端下に「織田作之助」の文字が印刷された原稿用紙に書かれていて、全て同じ種類のものである。

(2) 「清楚」と「織田作之助」の文字は二行取りである。

(3) 「二」は、二行取りであり、前に二行分の空白行あり。

(4) この原稿用紙は、右端下の一部分が破損しており、「老人」の下―マスは読むことができない。

(5) 「二」も二行取りであり、前二行は空白行である。

(6) 「二」も二行取りであり、前二行は空白行である。

(7) この原稿用紙の裏面に数字の羅列と計算の書き込みの跡あり。

(8) この原稿用紙の裏面にも、数字の羅列と計算の書き込みの跡あり。

(9) この原稿用紙の裏面にも、数字の羅列と計算の書き込みの跡あり。

(10) この原稿用紙の裏面には、数字の計算の書き込みの跡あり。

(11) この原稿用紙の裏面には、数字の羅列の書き込みの跡あり。

(12) この原稿用紙の裏面には、「借書」「階」「楷」の書き込みあり。

(13) この原稿用紙の裏面にも、数字の計算の書き込みの跡あり。

(14) この原稿用紙の裏面にも、数字の羅列の書き込みの跡あり。

(15) 織田文庫―草稿II―90は、織田文庫―草稿46の原稿用紙と、

全て同じ種類のものである。ただし、『1』のみ、原稿用紙を中央で裁断した右部の原稿用紙に書かれているため、200字詰め¹の体裁になっている。

- (16) 「清楚」と「織田作之助」(「十八」)の文字は、二行取りである。
- (17) 「清楚」と「織田作之助」(「十三」)の文字は、二行取りである。
- (18) 「清楚」と「織田作之助」(「十八」)の文字は、二行取りである。
- (19) 「清楚」と「織田作之助」(「二十七」)の文字は、二行取りである。
- (20) 「清楚」と「織田作之助」(「二十九」)の文字は、二行取りである。
- (21) 「清楚」と「織田作之助」(「二十九」)の文字は、二行取りである。

(かつくら あい)